

2015.9.29 三朝町竹田保育園

アドバイザー

鳥取大学地域学部 教授 塩野谷 斉 先生

【報告書】遊びきる子どもを目指して～環境側面から考えてみる～

環境保育を研究する会

はじめに

研究会の討議の柱は、「子ども主体の保育を求めて」～環境の側面から考える～です。柱の内容を踏まえた当園の取り組みについて説明します。当園は少子化に伴い小規模保育園で、クラス編成も少人数異年齢です。子どもの姿の中には、楽しく元気に園生活を送っているようでも、指示待ちや自分をうまく表現できないというのがここ数年に見られる特徴です。また、少人数のために保育者主導の保育になりがちであることも実態として挙げています。その実態を踏まえ、支援のしすぎにならない保育にどう取り組むか？子どもの主体性を尊重した物的環境、自然環境、人的環境は何か？特に遊びの中で保育者が行う子どものための環境構成は何か？等を考えてきました。

鳥取大学地域学部 塩野谷斉教授の指導助言のもと、中部教育局 小田先生、船岡保育所の先生、三朝町教育委員会 教育長 教育委員 指導主事、三朝町小中学校長、三朝町会議員、三朝町内保育園の先生と一緒に研修を深めました。

研修での大きな習得は、保小の接続を考える上で重要なことは子どもの学びがどのように発展していくかを理解すること。幼児期の学びの芽生えでは、遊びの中で楽しみ、試し、工夫し、見通しを持つというふう子ども自身が遊びを発展させていくこと。つまり、それが鳥取県のめざす幼児の姿「遊びきる子ども」だということ。そして、それが小学校の低学年の自覚的な学びにつながるということがわかりました。

研修で学習した主な内容は次のとおりです。

遊びは学び

～保育は人となる経験の連続～

1. 子どもの遊びの真剣さ

遊びとは

大人の目線 → たかが遊び

↓

子どもの目線 → 真剣さ・切実さ
ひたむきさ

2. 大人の遊びと子どもの遊びの相違点

大人の仕事と子どもの遊びは、同じ価値がある。

↓

子どもの遊びの価値を認識することが重要。

3. 遊びと学び、癒し

大人が子どもに求める勉強の多くは、言語情報である。(言葉を言葉だけで教える)
言葉を言葉で表現するには限界がある。つまり言葉の理解は、最後は実感である。

↓

実感とは・・・美しい・嬉しい・悲しい・寂しい等、様々な感情の体験をすること。

↓

直接体験が重要となる。

⇒豊かに保障するのは、小さい子どもの場合、遊び

子どもは、様々な遊びの中で人や物と濃密に関わる。

好奇心、探求心の発揮、気づき、発見、達成感、満足感

↓

結果として学びとなる。

遊びには癒しの効果がある(感情コントロールの学習)



4. 遊びと生活

幼い子どもたちの遊びと生活は、大人に比べてはるかに分けがたい。

⇒そのような子どものありようそのものが、子ども自身のその後の成長発達を支える力となる。

⇒遊びとの連続の上で、好奇心、探求心を持って、狭義の生活の経験も深める。

5. 遊びとモノづくり

子どもの発達と環境

子どもは、人や物にかかわりたいから関わる。その結果として学びがある。

子どもは、遊びによって環境と広く濃密に関わる（相互作用）

その強い見方がモノづくり

↓

作るということは、子どもがその対象としての素材と強く向き合い濃密に関わること。

その時に学びが大きい。

6. 直接経験と間接経験

直接経験とは

⇒地を這うようにしてあそぶこと。さまざまなモノやヒトにじかに触れる体験。

間接体験とは

⇒直接体験を支え豊かにするもの（例えば絵本等）

7. 「遊びきる」子ども

鳥取県教育委員会

「鳥取県幼児教育振興プログラム（改訂版）」

充実した遊びは、乳幼児の発達を保障する。

それが学童期以降の学びへつながる。

↓

【確認事項】

- 幼児期は、遊びながら学ぶ時期である。
- 遊びは、幼児期にふさわしい学びである。
- めげす子どもの姿を「遊びきる子ども」とする。

↓

「遊びきる」とは

⇒一人一人が自己発揮し、様々な葛藤体験を乗り越えながら友だちと関わって十分に遊びこみ、満足感や達成感を味わうことができている状態。

鳥取大学地域学部 塩野谷教授の講演及び指導助言から

終わりに

この研修で、遊びの中での「学びの芽生え」が、生涯の学びの出発点になることがわかりました。特筆すべき点は、学びの芽生えがどのように自覚的な芽生えにつながるかです。具体的には、以下の3点です。興味の広がり、自己調整する力、気づきです。この力を十分に育てるには、保育者が学びの芽生えを強く意識しながら遊びの援助をすることだと考えます。つまり、人的環境である保育者は、子どもの行動を監視、命令するのではなく、子どもと一緒に自然の不思議さ、大きさ、美しさを発見することだと考えます。

今後も子どもたちが主体的に遊べるように、子どもの実態を十分に把握し、魅力的な空間、楽しい空間を保育者しっかりと頭に描き、それを実践に繋げていきたいです。

また、幼児教育を小学校以降の「準備」ではなく、「土台」だと捉え、遊びを中心とした幼児期にふさわしい生活の中で、学びの芽生えを培うことを大切にしていきたいです。

（文責：竹田保育園 藪田 弘美）

